



演劇(エンゼルメイク・看取りの場面)



寺小屋トーク



僧侶は何をしてきたのかと考えさせられたという。やがて、師は「應典院プロジェクト」を立ち上げ、應典院の再建計画を始動させる。このプロジェクトに関わった4人は、師以外すべて在家の方であった。定期的に檀信徒への説明会を行い、試行錯誤の末に應典院は再建された。

應典院は、日本初の寺院とNPOのパートナーシップとして、宗教法人としての應典院と、各種の事業を担当するNPOの「應典院寺町倶楽部」が協働している。「應典院寺町倶楽部」は、柔軟な組織体でありたいがために、あえてNPO法人格は取得していないという。

「寺の原点として、学び、癒し、楽しみの3つの役割を今日的に再生しようとした」と語る師。應典院はこの3つの機能を持ち、社会に開かれた寺院として活動をスタートした。

師の説く「社会に開く」とは、単なる場所の開放を言うのではない。「寺は人と人が出会う場であり、異なる他者と出会うコミュニケーションとなる必要がある」と語る。当初は新興宗教や自己開発セミナーの方まで来山され、困惑したというが、「檀信徒という保証された関係がなくなるから、一から始めなければならぬ。その分リスクを伴うが、すばらしい出会いがあつて、お寺の潜在的な魅力が發揮されました」という。

應典院では、演劇の劇場として利用されることが多い。なぜ演劇なのか、と問うてみた。

「演劇活動は若者たちのコミュニケーションであり、身体と言葉を使って、人間関係をやり直す場です。應典院では演劇の稽古場も毎日提供しているのですが、フリーターたちが集まっています。ほとんどが非正規雇用ですから、働くことや将来への不安を持っていきます。晴れの舞台に至る長いプロセスにかかわっていく中で、若者たちの生きづらさや生き難さにも出会ってきました。演劇のうまい下手を問う

のではなく、それが磁場となって、学校にも会社にもない人間関係を創り上げていく。演劇は、若者たちに生き方を問い直す貴重な機会となっている、と思います」

次に寺院の公益性について聞いた。

「今『新しい公共』は政策の中核課題でもあります。それは結構なことですが、寺院は、行政や民間のセーフティネットからもなおほれおちる人々の救済に当たるべきと思います。末期患者や自死遺族、ホームレス支援など、若い僧侶たちの意欲的な活動に期待しています」

また、師はNPOと寺院は違う、という。

「NPOは問題解決が目的であつて、そのための手段や効率が問われます。しかし、寺院は、その問題の奥に潜んでいる個人の心の部分にどう向き合っていくかが重要であつて、人間性の根源との対話が本当の役割です。華々しい海外活動も結構だが、まず寺院は自らが立つ地域にこそ目を向けて、関わってほしい」

最後に若い宗侶に対してアドバイスを求めた。

「まず、自分とは異なる多様な人と出会うことです。若い間は、僧侶としてではなく、まず一人の人間として公益活動にかかわってほしい。そこで、失敗したり、苦悩したりする経験が大事であつて、宗派や寺の看板に隠れていては見えにくいものです」



應典院代表秋田光彦師

### 應典院寺町倶楽部

住所◎  
〒543-0076 大阪府大阪市天王寺区下寺町  
1-1-27 應典院内  
電話番号◎06-6771-7641  
Fax番号◎06-6770-3147  
E-mailアドレス◎info@outenin.com  
ホームページ◎http://www.outenin.com  
法人形態◎宗教法人應典院、  
非営利組織「應典院寺町倶楽部」  
代表者◎秋田光彦師  
設立年月日◎平成9年4月  
主な活動内容◎  
演劇、美術展。ワークショップ、講演会  
スタッフ数◎5名  
来訪者数◎年約3万人

(取材・文 川口高裕、広報委員会委託委員)

「また現場では必ず教義との葛藤や矛盾が起こります。檀信徒対象ではないので、教義というカードが容易に使えない。その時こそ、自分自身の僧侶としての自明性が問われると思います。外から問われてこそ、成長できるのです。問われながら、また自身自身に問いながら、教えとの対話を積み重ねていくしかないと思います」

流れを変えていくのは若い宗侶たちしかない。師は、力強く期待を述べられた。



コンクリート打ちっぱなしのモダンな外観